「はたちの献血キャンペーン」に寄せて

沖縄県赤十字血液センター　所長　百名　伸之

2019年末、突然出現したSARS-Cov-2による新型コロナウイルス感染症はまたたくまに世界に災厄をもたらし、3年を経過してなおコロナ前への回復は見えていません。医師会会員の皆様も、日々の診療に大変なご苦労をされていることと思います。この間、医療の根幹をなす血液事業も多大な影響を受け、献血者数の減少は国家レベルの問題となっています。さらに近年は少子高齢化の影響で10～30歳台の若年層の献血者が減少傾向にあり、将来的に輸血医療の危機が叫ばれています。

「はたちの献血キャンペーン」は厚生労働省、都道府県及び赤十字社の主催で1975年より実施されており、冬季の献血者の確保、および新たな成人を迎える「はたち」の若者を中心として広く国民に献血への理解と協力を求めることを目的としたイベントとなっています。2022年も1月1日から2月28日の2か月間、「いのちにとどけ、笑顔のエール！」をキャッチフレーズに、山之内すずさん、ぺこぱさんをキャラクターに起用して実施されました。沖縄県では県庁県民広場での該当キャンペーン、新聞・テレビ・ラジオ各社を活用しての広報を行い、さらに県内各大学にポスターを掲示して若年層の献血意識向上に努めました。図1は令和3年度の月別献血者数ですが、総数で55,975人の方々に献血いただき、1～2月の冬季にも大きく減少することなく推移しました。また、この時期は新型コロナ感染第6波のピーク（1月18日、679.03人/10万人/週）にありましたが、大きな落ち込みは回避されています。これはキャンペーンが奏効したものと考えています。

一方、令和3年度の年齢別献血割合をみますと（図2）、16～39歳の若年層が37.7%、40～69歳の中高年層が62.4%と、依然若者の献血が少ない状況にあります。また、これをそれぞれの人口割合でみると、若年層は5.1%、中高年層は6.0%とやはり献血への意識に違いが

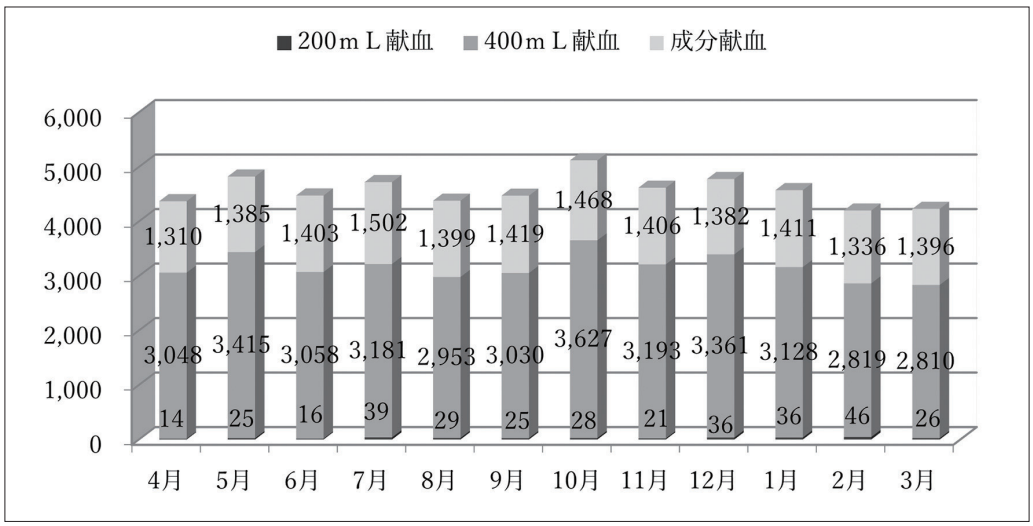

図１　令和３年度　月別献血推移

あることがわかります。日本赤十字社の全国推計によりますと、今後の少子化による献血者実数減少、高齢者人口増による血液製剤需要増加により、2035 年には約 46 万人の献血者延べ人数が不足するという衝撃的なシミュレーションとなっています。この状況に対処すべく、沖縄県赤十字血液センターでは若年層の啓発目的で小中学校での献血教室、高校大学での移動バス献血を積極的に行っており、将来の献血者確保に向けて日々活動を続けています。

2023 年も 1 月 1 日から 2 月 28 日まで「はたちの献血キャンペーン」を展開します。現代医療は輸血なしには立ち行きませんし、また先端医学でも未だ安定供給可能な血液製剤作成は実現していません。医師会の皆様方におかれましても、診療の一環としてこのキャンペーンにご協力いただければ幸いです。

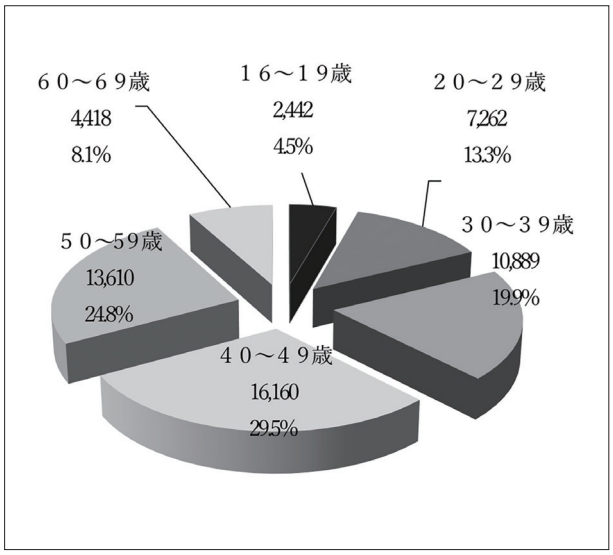

図２　令和３年度　年齢別献血者数

原 稿 募 集

プライマリ・ケアコーナー（2,500字程度）

当コーナーでは病診連携、診診連携等に資するため、発熱、下痢、嘔吐の症状等、ミニレクチャー的な内容で他科の先生方にも分かり易い原稿をご執筆いただいております。

奮ってご投稿下さい。

随筆コーナー（2,500字程度）

随時、募集いたします。日常診療のエピソード、青春の思い出、一枚の写真、趣味などのほか、紀行文、特技、書評など、お気軽に御寄稿下さい。

なお、スポーツ同好会や趣味の会（集い）などの自己紹介や、活動状況報告など、歓迎いたします。

いきいきグループ紹介コーナー（1,000字程度）

各研究会、スポーツ同好会や模合等の活動紹介などを掲載致しますので、どうぞお気軽にご紹介下さい。

発言席コーナー

会員の皆さまの御意見、主張を掲載いたします。奮ってご投稿下さい。

本の紹介コーナー（1,500字程度）

感動した、生き方が変わった、診療が変わった、新たに真実を知った本等々、会員の皆様の座右の本をご紹介ください。